

夫婦間の性別役割分業はなぜ変わらないのか

—既婚女性⁽¹⁾へのインタビュー調査から探る—

ささがわ あゆみ いけまつ れいこ おぜき たかこ きたはら れみん
笹川 あゆみ* 池松 玲子** 小関 孝子*** 北原 零未****⁽²⁾

1. はじめに

日本はジェンダー平等な社会の実現に対して、前進と後退の間を揺れ動いている。1985年に成立した男女雇用機会均等法をはじめ、男女平等な社会を実現するための法制度が徐々に整ってきた。1999年に施行された男女共同参画社会基本法は、職場のみならず家庭や地域社会においても、「男は仕事、女は家庭」という固定的な性別役割分業を解きほぐし、性別にかかわらず個人個人を尊重する社会の実現を目指している。女性の社会進出が進む一方、ここ数年では「イクメン」、「家事の分担」といった言葉も一般的になり、男性の家庭進出を促す動きも見られるようになった。

しかしながら、日本にはまだまだ男女格差が大きく存在している。例えば、世界経済フォーラムによる男女平等指数をみると、日本は142カ国中104位（2014）である。2013年の105位より順位を一つ上げたとは言え、まだまだかなり低い。98位（2011）、101位（2012）と続いていた後退に、ようやく歯止めがかかったに過ぎない。一向に順位が上がらない主な原因として挙げられているのは、依然として変化することのな

い性別役割分業観である。

固定的な性別役割分業観と密接に結びついているのが、日本の結婚のあり方である。夫は「稼ぎ手」「養う者」であり、妻は「家庭の守り手」「養われる者」というロールモデルはいまだに強固である。かつての絶対的な結婚から個人の選択としての結婚が認められるようになり、未婚化・晩婚化が進んだにもかかわらず、結婚制度そのものは否定されることなく、性別役割分業にも大きな変化はない（島 2012）。

このような背景を踏まえ、本研究では女性たちの結婚における性別役割分業に対する意識を探り、従来の結婚のあり方に変化を求めているのか否かを探りたい。従来の結婚のあり方、つまり「夫は仕事、妻は家庭」が根強く維持されている要因の一つとして、女性たちの支持があると推測される。本研究は既婚女性にインタビュー調査を行い、固定的な役割分業観に基づく結婚が維持されていく要因を女性たちの語りの中から見出していくことを目的としている⁽³⁾。

以下、まずは結婚において依然として残る性別役割分業の問題点を先行研究から整理する。次に、既婚女性に行ったインタ

*武蔵野大学他非常勤講師、2013/14年度客員研究員

**東京女子大学大学院人間科学研究科博士後期課程、共同研究者

***一般社団法人社会デザイン研究所特別研究員、共同研究者

****大妻女子大学他兼任講師、共同研究者

ビュー調査から、第一に夫婦間の性別役割分業に対してどう思っているのか、第二に結婚して良かった点と悪かった点とは何か、第三に対等な夫婦関係であることを望むか、という問いに対する答えを提示し、女性自らが従来の結婚のあり方をどう意識しているか考察する。

2. 結婚における性別役割分業に関する問題点の整理

戦後の高度経済成長期に都市部から広まった「夫は仕事、妻は家庭」という性別役割分業に基づく夫婦のあり方は、結婚と同時に女性たちを生産労働から解放しつつとして、女性たちの憧れの対象となった。家事・育児に専念する主婦というステータスは既婚女性の誇りであった。「企業戦士」を家庭で支える妻のあり方が理想となり、また妻の無業は夫の稼ぎが充分であることを示すとして、喜ばしいこととなった。

ところが、1980年代、結婚は女性に不幸をもたらすものという考え方が登場した。『家庭内離婚』(林 1985)、『主婦症候群』(円 1982)等といった、不幸な結婚生活を嘆きながらも、そこから逃げ出すことができない女性たちの嘆きを描いた本がベストセラーになり、「女性の自立」が叫ばれるようになった。家事育児への専念は、当然ながら夫に対する全面的な経済的依存を意味する。「雇い主」である夫の意に沿うことに抵抗がない妻であれば問題はないが、そうでない場合であっても、経済的に自立ができない妻には夫に従うという選択しか残らない。落合(1994)は「家族の戦後体制」の変容を論じる中で、主婦という生き方には夫が「死なない」、「失業しない」、「離婚しない」という三条件が必要であると述べ(落合 1994: 248-250)、結婚制度が生

み出す女性の夫への依存というリスクを指摘している。夫が妻を経済力と権力で支配する家父長制的な結婚のあり方からいかに脱却するのかという問いは、性役割研究⁽⁴⁾から始まった日本の女性学が取り上げ続けている課題の一つである(井上 2009: 3)。

経済的な問題以外の弊害も指摘されている。松田智子(2000)は、現代日本の夫婦における家庭内の役割分業は、「男性の抑圧」、「夫婦間のコミュニケーション不全」という歪みを引き起こすとしている。夫の役割は経済的責任を果たすこと(のみ)という結婚のあり方は、男性の長時間労働を当然とし、家庭からの疎外を引き起こす。果ては過労死や過労自殺という社会病理まで起きてしまう。また、夫と妻の役割が歴然としている性別役割分業型の夫婦は、それぞれの役割が決まっているのでコミュニケーションも必要とされず、夫婦関係の希薄化に拍車をかけるとしている(松田 2000: 141-144)。さらに、善積(1997)は、「性別役割分業を前提にした法律婚単位の日本の社会では、法律婚家族の維持のために非婚の母や婚外子は差別され、妻の経済的自立の権利も保障されない」(善積 1997: 288)とし、法律婚によらないパートナーシップや家族の広がりこそが男女平等な社会の実現につながるのではないかと訴えている。

上記のように様々な問題が指摘されながらも、日本の結婚や夫婦のあり方は、1980年代以降あまり変わっていない。松田茂樹(2013)によると、出産後に就業継続する女性は増えていないし、夫の家事・育児参加も進んでいない。少なくとも育児期においては、固定的な性別役割分業を行っている夫婦は圧倒的に多数である。近年、女性の年齢階級別就業率を示すM字型カーブの底が上がっている原因は就業継続する女性の増加ではなく、未婚者の増加である。要

するに、「夫は仕事、妻は家庭」という従来の夫婦のあり方は、ほとんど揺らいでいないと指摘している（松田 2013：35-36）。また、1994年と2005年に行われた「家庭教育についての国際比較調査」の結果から、その10年の間に日本では子育てに参加する父親の割合が低いままほぼ変化していないという結果を受け、牧野（2010）は、「どうすれば日本の男女の役割分担は変化するのでしょうか。前途多難であることがわかります」（牧野 2010：35）と嘆いている。

夫婦間の役割分業意識が維持されている要因として、男性だけでなく女性の意識もかかわっているのではないかという指摘もある。国立社会保障・人口問題研究所が2013年に実施した「第5回全国家庭動向調査」の結果によると、夫と妻の家事分担割合の平均は、妻85.1%に対して夫14.9%であり、妻の負担割合が圧倒的に多い（国立社会保障・人口問題研究所 2014：16）。しかし、夫の家事に対する妻の期待については、「期待する」は31.4%に過ぎず、他方「期待しない」は68.6%と高い（国立社会保障・人口問題研究所 2014：22）。

また、首都圏30km圏在住で末子が12歳以下の妻を対象にした調査を行った中川は、夫の家事育児参加が進まないのは夫側にばかり原因があるのではなく、妻が強い家庭責任意識を持って育児・家事を行うことで夫の参加を制約しているという妻側の原因も指摘している（中川 2010：210-211）。

3. 調査について

(1) 調査方法

本研究では、女性たちの結婚における性別役割分業に関する意識を探るため、機縁法による半構造化ライフストーリー・インタビューという質的調査を用いた。その理

由は、既婚者を対象とした結婚をめぐる問いは、極めて私的な領域へと踏み込む調査となるため、女性たちの真意を聞き出すためには対面での聞き取りが最も有効であると判断したためである。基本的な情報を得るために半構造化インタビュー法を用い、結婚の経緯について／結婚前の理想と結婚後の現実／結婚して良かったことと我慢していること／対等な夫婦関係について、の各項目を軸に話を聞いていった。

インタビューの実際的手法としては、語り手の発話を阻害しないように配慮しつつ、語り手と聴き手の間で自由な会話が行われ、「何を語ったのか」だけでなく「いかに語ったのか」にも注意をはらうアプローチであるライフストーリー・インタビューを実施した⁽⁵⁾。ライフストーリーの語りは語り手にあらかじめ保持されていたものの表出ではなく、語り手と聞き手の相互行為を通して構築されるものである。つまり、ライフストーリーは価値観や動機によって意味構成された主観的なリアリティと言える⁽⁶⁾。結婚という体験をめぐるイメージ、感覚、感情、欲望などによって構成された主観的なリアリティこそ筆者らが関心をもつものであり、量的調査では表れにくく、また語り手にとって他人には話し難い語りをすくい取り読み解いて、女性たちの結婚についての意識を明らかにしたい。

(2) 調査対象

調査対象としてはある程度の婚姻年数を経ていることが必要と考え、年齢は30歳前後から60歳前後までとした。また、本調査では、都市部と地方の結婚観に差はあるのか、あるとしたらそれはどのようなものなのかを探るため、東京と九州地方（北九州市・熊本市）に協力者を募った。九州地方

を選択した理由は、一般に九州はジェンダー規範意識、男尊女卑意識が根強いとされていること、また、他地域に比べて九州地方には多くの結婚情報誌が発行されていることから、「結婚に積極的な土地柄」であると仮定したからである。東京と九州を合わせて40名の調査協力者を得て、東京調査は2013年10月から2014年4月にかけて、熊本調査は2014年2月から3月にかけて、北九州調査は同年3月に実施した。調査協力者の概要は表1にまとめた。

対象者の年齢は20代1名、30代14名、40代13名、50代10名、60代2名で、30代、40代、50代が中心となった。地域別では、東京都14名（30代4名、40代4名、50代5名、60代1

名）、熊本市近辺12名（30代6名、40代5名、50代1名）、北九州市近辺14名（20代1名、30代4名、40代4名、50代4名、60代1名）だった。

学歴は高卒5名、専門学校卒7名、短大卒12名、大学卒14名、大学院卒2名であり、比較的高学歴者が多い結果になった。

結婚前の就業状況は、不明の2名、学生1名を除き、40人中37名が就業しており、うち自営業と家業の専従の3名を除く34名が雇用者で、うち把握できた正規雇用者が19名だった。対して現在の就業状況は、無職の8名を除くと、32名がなんらかの形で就業していたが、結婚前と比較して「会社員」が大きく減少している。

表1 調査協力者一覧（データは調査時のもの）

東京調査	年齢	職業(結婚前)	職業(現在)	学歴	子供	東京調査	年齢	職業(結婚前)	職業(現在)	学歴	子供
東A	30代	専門職	自営業の専従	専門学校卒	2人	東H	40代	会社員	専門職(パート)	大学院卒	1人
東B	30代	会社員	無職	大卒	3人	東I	50代	会社員	無職	専門学校卒	6人
東C	30代	専門職	専門職(パート)	大卒	3人	東J	50代	会社員	派遣社員	高卒	2人
東D	30代	会社員	専門職	大卒	1人	東K	50代	団体職員	無職	大卒	2人
東E	40代	医療専門職	医療専門職	専門学校卒	2人	東L	50代	会社員	パートタイマー	大卒	2人
東F	40代	不明	医療事務職	専門学校卒	1人	東M	50代	アルバイト	無職	大卒	2人
東G	40代	不明	医療事務職	短大卒	2人	東N	60代	自営業	自営業	大卒	2人
熊本調査	年齢	職業(結婚前)	職業(現在)	学歴	子供	熊本調査	年齢	職業(結婚前)	職業(現在)	学歴	子供
熊A	30代	会社員	自営業	専門学校卒	1人	熊G	40代	会社員	会社役員	短大卒	1人
熊B	30代	会社員	自営業	高卒	3人	熊H	40代	会社員	無職	短大卒	3人
熊C	30代	会社員	無職	大卒	1人	熊I	40代	会社員	無職	短大卒	2人
熊D	30代	自営業	自営業	大卒	1人	熊J	40代	会社員	自営業	短大卒	3人
熊E	30代	医療事務職	講師	専門学校卒	3人	熊K	40代	医療専門職	福祉専門職	短大卒	2人
熊F	30代	専門職	専門職	大卒	1人	熊L	50代	会社員	講師	短大卒	2人
北九州調査	年齢	職業(結婚前)	職業(現在)	学歴	子供	北九州調査	年齢	職業(結婚前)	職業(現在)	学歴	子供
北A	20代	専門職	専門職(パート)	短大卒	なし	北H	40代	会社員	専門職(パート)	短大卒	2人
北B	30代	会社員	専門職	短大卒	1人	北I	40代	会社員	団体職員(パート)	高卒	3人
北C	30代	学生	会社員	大学院卒	なし	北J	50代	自営業手伝い	団体職員(パート)	高卒	2人
北D	30代	アルバイト	専門職	短大卒	2人	北K	50代	会社員	アルバイト	大卒	2人
北E	30代	会社員	会社員	大卒	1人	北L	50代	会社員	無職	短大卒	2人
北F	40代	会社員	実家家業の手伝い	大卒	1人	北M	50代	会社員	団体職員	高卒	2人
北G	40代	アルバイト	団体職員(パート)	専門学校卒	4人	北N	60代	教師	公務員	大卒	5人

(出典) 筆者作成

4. 夫婦間の性別役割分業への意識

はじめに、女性たちの語りから、本調査の主目的である夫婦間の性別役割分業に対する意識を明らかにしたい。ここでの分析は、「結婚前に描いていた理想の夫婦関係・役割分担はどうだったか」そして「実際の夫婦関係・役割分担はどうか」という問いのうち、性別役割分業に関連する語りを抽出し、結婚前と結婚後の意識の変化を分析した。

まず、結婚前の意識についての語りを見ると、結婚の理由は、「子どもが欲しかったから」(熊D、熊E、熊K、東J)、「24までにしたかったから」(熊J)、「30までにはしたかったから」(東H)、「苗字が変わることに憧れがあった」(熊K、北J)、「相手のことが好きだったから」(東E、北C)などで、結婚自体は「当然するもの」という意識が先立っていたようであった。結婚前に描いていた夫婦関係の具体的なプランについては、18名が「あまり考えていなかった」と回答している。その他、「両親の関係があまりうまくいってなかったので、仲の良い明るい家庭にしたかった」(東E)や「亭主関白はいや」(東A)といった漠然とした希望があった場合でも、具体的なプランがあるわけではなかった。

さらに、性別役割分業については、「そんなものだと思っていた」(北M)、「母親が専業主婦、それが当然と思っていたので自分もそうなるだろうと思っていた」(東F)など、とりたてて深くは考えていなかったという語りがあった。また、「(夫は)自宅生だったし、家から出たことがない人だったので、なんにもできなかった」(熊K)や「実はお母さんが何もさせておられなかったんです。末っ子長男の跡継ぎが生まれた的な感じで育てられるもんです

から」(熊G)のように、結婚前から夫は家事が全くできないと分かっていたため、家事・育児は自分が引き受けるのが当然という意識で結婚をスタートさせたという語りがあった。

続いて、結婚後の実際の夫婦関係について尋ねた。その結果、多くの女性が、明確な意志で性別役割分業を肯定しているわけではないが、あまり抵抗を感じずに現状を受け入れていることがわかった。一部には、「性別役割分担が理想だと思っていた」(東A)のように明確な性別役割分業肯定派もいたものの、多くの女性はそれほど強い意識はなく、「専業主婦だったので、やっぱり女は家を守るという古い考えがあって」(北H)、「家事育児の負担の偏りはあるかも知れないが不満はない」(東B)など、あまり疑問もなく「そういうものである」と思って現状を受け入れたようであった。

あるいは、多少疑問を持っている場合でも、「(夫は)普段はとにかく朝早く夜遅い生活だから」(東L)、「自分が働いているんだったら分担しようと思っていたんですが、専業主婦だから。(夫の)仕事内容もわかっているから、無理も言えない」(熊I)などと、夫の勤務形態とのすりあわせで納得しているケースや、自分は専業主婦には向いていないと思いつつも「旦那が働かないでって。働くて言った時も、お昼までのパートでしょ？子どもちっちゃいしみたいな感じ」(熊E)と、夫の意向に沿うようにしているという語りもあった。

また少数ではあるが、性別役割分業に疑問を抱いている女性もいた。しかし、ここで興味深いのは、たとえ疑問を抱いていたとしても、最終的には女性役割を引き受けているという点である。「(家事を)ちょっとやったらすごくやったと思う、男性はね。それがやっぱりおかしいんじゃないか」

(東K) と思いつつも、主婦役割をこなしていく。また、妻の就業に理解のある夫であっても、だからといって家事・育児を分担するわけではない。つまり、肯定派にせよ否定派にせよ、現実的に日常で行っていることに大きな違いはないようであった。

夫婦の家事育児分担に関して、「それぞれやれることを分担している」(東D、熊B、北I)、「実際結婚したら楽だった。夫が私よりまめな人なので」(北J)のように、夫婦半々もしくは夫が妻以上に担っていると語られた例は4件のみであった。その他は、「夫も手伝ってくれている」という程度であった(東E他7名)。

なぜ女性たちは、結局のところ性別役割分業を受容しているのだろうか。その理由は従来から指摘されているように⁽⁷⁾、妻役割ではなく母親役割という意識によるものであることが見受けられた⁽⁸⁾。

その主な発言を示すと、「フルで働かなくてもいいんですけど、(やっぱり)子育てしている間は…」(熊I)と働く意思を持ちながらも子育て中の就業に躊躇するケースや、「家にいるのも結構つらい。どんなに経済的に安定したとしても専業主婦は無理」と言いながらも「子どもが学校から帰るときには必ず家にいたい」(東E)と望んでいるケースがあった。また、性別役割分業を疑問視している女性の場合でも、「生まれたばかりの子どもをお父さんひとりで育てられるのかというと、難しいところもあると思う」(北A)と述べているケースがあった。

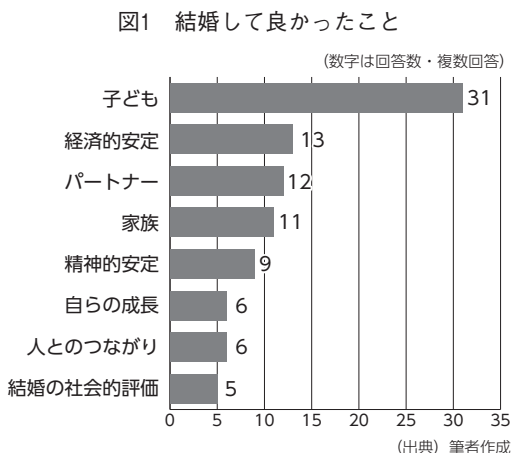
以上のように、性別役割分業については、過半数(25名)の女性に、結婚前も結婚後も「現状にあまり不満はない」「そもそも疑問に思っていない／意識にない」という傾向が見られた。彼女たちが性別役割分業を受け入れる理由は、「母親」にしかでき

ないことがあるという意識の強さによるものが大きく、子どものことは母親の領分という規範の内面化が見られた。性別役割分業を受容する理由は「妻役割意識」というより「母親役割意識」によるものであり、夫のためというよりは、子どもがいる以上、母親の行動は制約されて当たり前、自分が家庭内の責任を持つのが当たり前といった意識であると思われる⁽⁹⁾。

5. 結婚のメリットとデメリットへの意識

次に、女性たちは結婚することによって何を得たと考えているのかを探る。本節では、質問項目の中でも「結婚して良かったこと」、及び「結婚して我慢していること／結婚しなければ良かったと思うこと」は何かという質問の回答を分析して、回答者が「結婚して良かった」、「結婚して我慢している」と考えている内容を明らかにしていく。全体の傾向を見るために、回答を分類した図1及び図2を参照しつつ内容を質的に分析していく。

はじめに、図1をみていくと、「結婚して良かったこと」に対しては「子ども」とい



う回答が最多で、これに「夫(「パートナー」、「主人」、「旦那」等を含む)」、「家族」という回答を加えると他の回答を大幅に上回ることがわかった。つまり「結婚して良かった」ことは大卒では家族を得たことと考えられる。回答数が多かったことに着目し、ここでは「家族」すなわち「子ども」と「夫」をめぐる回答を中心に検討していく。

「子ども」という回答を詳細に見ていくと、「子どもが持てた。それが一番嬉しい」(北L)というストレートな回答から、「(結婚前は子どもに関心が薄かったが)、生まれたら可愛いと思った。子どもを持てて良かった」(東N)という回答まで内容は一様ではない。だが、いずれのケースでも「子ども」が結婚における重要な要素であるとの認識は強い。

さらに、子どもをめぐる回答と関連して、子どもをもつためには結婚制度が重要であるとする回答がみられた。「夫はいつでもいいんだけど子どもが欲しいから。でもそのためには結婚していないと」(東M)、「結婚制度としてはどうかと言えば、子どもがいなければ制度も必要ないかもしれない」(東I)、「(女性一人で家を構え仕事をして子育てすることは無理なので) 一応家

族という形のなかで子どもを生んで育てられたということに関しては、結婚制度はいいのかもしれない」(東J)等である。ここには結婚制度内で子どもを持つことの重要性が語られ、夫よりも子どもを優先する傾向が見られる。

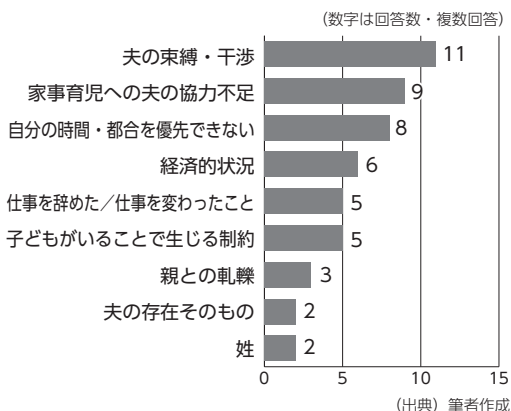
他方、「夫」については、「人生を一緒に歩く人が、夫ができた」(東M)という単純な回答の他に、培ってきた関係性を述べるケースが複数あった。東さんは、結婚して26年たっているが、「口もききたくない時期もあった」と言い、「そういう時期を乗り越えて理解できたのが良かった」と語っている。また、「(子どもを亡くしたという) 経験が2人の絆になった」(北I)と深い関係性に言及しているケースもある。つまり「子ども」の存在は無条件に結婚で得られる重要なものという認識に対し、「夫」については、存在そのものより良好な「関係性」が重要視されていると見られる。

次に、「結婚して我慢していること／結婚しなければ良かったと思うこと」についての回答を見ていく。図2を参照すると、図1ほどの顕著な傾向はみられないものの、「夫の束縛・干渉」と「家事育児への夫の協力不足」が回答の上位を占めていることがわかる。

「夫の束縛・干渉」には、「夫は夫の友人が来ると、私が外出するのを嫌がる。出たののに我慢することもある」(北N)というケースや、「一度か二度ちょっと手をあげられて」(北H)という経験から一時は離婚を考えたというケースまで程度に開きがあった。しかし、いずれのケースにしる、束縛や干渉が危うさを伴う状況として認識されているわけではない。

他方、「家事育児への夫の協力不足」については、母親による育児を当然視される

図2 結婚して我慢していること



ことへの不満や、妻だけが日常的に継続して家事を担うことへの不満などが見られる。ここで注目したいのは、家事・育児を「何もしてくれないから腹が立って、子ども連れてプチ家出」しても反応が少ない夫に「そんなことが繰り返し、繰り返し。あまり期待しないように」(熊I) になっていったという語りである。他にも、「自営になったとたんに、休んでいられないと言われ、手伝ってもらってはあきらめた」(東A) など、不満が「あきらめ」になっていく様子が語られている。

同様に「仕事を辞めたこと／仕事を変ったこと」についての不満もやがて不満とは考えないように変わっていく様子が語られている。子どもができて仕事を辞めたことを「残念だったという気はします」と思いつつ「辞めたあとがとっても楽だった」(東K) というケース、仕事を辞めたことを思い出す度に結婚しなければ良かったと思うが「必要とされる場所にいるのが良い」(北N) と考えるようになったケースがあった。

以上の分析から、「結婚して良かった」ことが多くのケースで「子ども」だったことは明らかで、子どもを含む家族を得たことが結婚の喜びとしてとらえられている。その一方で、結婚相手をめぐっては、必ずしも結婚相手を得たことではなく、夫としての良好な関係性が望ましいものとされている。

続いて「結婚して我慢している」ことについては、「夫の束縛・干渉」と「家事育児への夫の協力不足」が多数を占めた。そこには「夫の束縛・干渉」への危機感は薄く、家事育児に夫の協力を得ることが困難な状況から、不満があきらめになっていく状況が生じている。同様に「仕事を辞めたこと／仕事を変ったこと」についての不

満も、やがて不満を抑えて現実と折り合っていく様子が見てとれる。

6. 夫婦間の対等な関係への意識

前述したように女性学が問題視した夫婦間の性別役割分業は、そこに「夫は主で妻は従」という夫が優位に立っている関係を前提としたものであった。したがって、妻は夫に従うという主従関係ではなく、互いに対等な夫婦関係を確立するためには、従来の性役割は解体する必要があるとされてきた。しかし、当の女性たちにはそうした意識があるのだろうか。女性たちは夫婦の関係性において、「対等」を望んでいるのだろうか⁽¹⁰⁾。

そもそも、「夫婦が対等である」というのはどのような夫婦関係であると女性たちは思っているのだろうか。本研究では「対等な夫婦とはどのような関係だと思いますか」という問いに対する女性たちの語りから、「対等」が意味するものを大きく三種類に分けて分析した。

一つ目は、「経済的な対等性」である。「収入が同じという事が平等な関係だと思うので、私たち夫婦は対等ではない」(東A)、「今は自分の仕事があり収入があるので対等になった」(東N)、「対等な夫婦のイメージとしては、女性も経済力がある」(北L)のように、互いに経済的な貢献をもって夫婦は対等という語りが9名からあった。ただ、「収入が全く同じ」という発言は少なく、ほとんどの女性は収入の割合や額について言及しなかった。さらに、「家事分担も含めて対等」という発言が、自立できる収入を得ている数名の女性からあった。

二つ目は、「互いに言いたいことが言える／主張し合う／話し合う関係」である。「言いたいことが言える関係が対等」(東

B)、「互いに話し合って決めるような夫婦は対等だと思う」(熊C)等、「会話・発言の対等性」を挙げた女性が11名であった。

三つ目は「思いやって助け合う／尊重し合う関係」である。「お互いの気持ちを思いやりながら行動できる夫婦が対等」(東I)、「互いに助け合える関係」(熊B)、「互いに尊敬して感謝している夫婦が一番理想」(北A)等、「精神的に支え合う対等性」を挙げた女性が16名であった。「人間として対等」(東H)「心の中では対等」(北C)「気持ちの上での対等」(北N)といった表現もこのカテゴリーに含めた。さらに、「夫婦それぞれ特性を生かして生きているのだから、人間関係としては対等」(北M)のように、性別役割分業が対等な関係を作るという語りも複数あった。

次に、「対等かどうか気になるか／対等でいたいか」「夫婦関係がうまくいくためにはどうしたらよいか」という問いに対しての語りから、女性たちは「対等な関係」を望んでいるのかどうかを分析していく。

まずは、対等な夫婦関係を実践しているという女性たちの語りである。上記の三つの「対等」のいずれかをもって、自分は夫と対等であると考えている女性は19名であった。「(自分たちは)対等だと思う」(東C)、「夫とは互いに思っていることは素直に言おうと決めている」(北D)、「ずっと対等だと思っていた。専業主婦の時も対等だと思っていた」(北M)という発言、さらには、「たまに言い過ぎてケンカみたいになるんですけど、我慢するとどっちかが崩れてしまうかな」(北D)と長期的に見れば我慢しない方が結婚生活の維持には良いという発言があった。また、元々妻が我慢していたが、「2年前にキレて」不満をぶつけたところ、夫婦関係が改善されたとい

う発言もあった。「私の方が物言いが強い。(何故なら)夫が稼いでいる上に、上から目線でものを言われるのは嫌だから」(熊I)という、専業主婦であって経済的な対等が望めないのであれば、あえて夫に対する物言いを強くすることによって対等な関係を作っているという語りもあった。

続いて「対等を良しとしない」女性たち(9名)の語りである。「良しとしない」と言っても、「夫に服従する妻であるべし」という事ではなく、「夫を立てた方がうまくいく」という意識であった。「対等ではいけないと思っている。自分は強い性格なので、少し下の方がうまくいく」(東B)、「男のパライドは立てておいた方が家庭はうまくいく」(東F)等、積極的に「対等ではない」関係を肯定していた。また、「経済的な対等性」を求めても「しょせん無理」「そこまで頑張れない」(東A)といった語りもあり、「女としてちょっと甘えさせてほしいとか、ずるいんですかね」(北H)というように、妻側が夫に頼る関係を望んでいるという傾向が見える。

他方で、「対等を望んではいるが、実際には夫を立てている／自分を抑えている」と、多少なりとも葛藤を抱えた女性が複数いた。対等な関係でいたい、夫に不満をぶつけると反発されるので「疲れる」「面倒くさい」「ケンカになると煩わしい」ので、自分を抑えてしまうという。こういった女性たちの中には離婚に至ってしまったケースもあったが、夫との関係の改善を模索しているケースもあった。

その他に、「夫とは対等な関係。夫を立ててはいるが、束縛はされていない」(北I)というように「対等であること」と「夫を立てること」が矛盾していないという語り、「妻のほうが上」という語りが数名ずつから行われた。

以上から見てきたことは、まず、ほとんどの女性は夫との「対等」な関係を望んでいるということである。「対等」のとらえ方が様々であり、「経済的な対等は無理なので、精神的に対等でいたい」というように、それぞれの夫婦の関係性の中で力関係のバランスを取ろうと試みているのではないか。また、「夫と対等でいたい」と「夫を立てる方が良い」は、必ずしも相対する考えではなく、結婚生活をうまく維持していくための「戦略」の違いであると考えられる。「対等に主張し合う関係が良い」「どちらかが我慢したら無理が出てくる」と考える女性は「対等」でいることで結婚生活に満足感を覚えている。他方で「夫を持ち上げておけば、機嫌も良くなるし、私も楽」と考える女性は、夫婦関係に「対等を求めてない」と言いつつも、自らが「へりくだる」ことによって満足できる夫婦間のバランスを図っているのであり、夫に従属する関係性を望んでいるわけではない。

しかし、夫婦の関係は相手があることであり、妻側の「戦略」だけで対等性が決定されるわけではない。夫とほぼ同じ額の収入がありながら家事育児を全面的に負っていたり、言いたいことがあっても夫の反発が強いので口をつぐんでしまったりという状況に対して、「夫を優先する方が結婚生活はスムーズにいくが、自分自身は納得できない」と葛藤を抱えている妻の声もあった。

7. 夫婦間の「対等性」と矛盾しない性別役割分業

本稿では、日本において「夫は仕事、妻は家庭」という固定的な性別役割分業観が維持され続けている要因の一つに、女性自身もそれに対して強い抵抗感を覚えていな

いことも含まれているのではないかと仮定し、女性たちの意識を探った。

明らかになったことは、まず第一に、女性たちは結婚における「夫は仕事、妻は家庭」という性別役割分業に対して、全体的に結婚前から強く肯定も否定もしておらず、結婚後は、基本的には家事や育児を自分の担当として受け入れる傾向にあった。

第二に、母親役割として家庭責任を強く意識していることが、性別役割分業への肯定に結びついていることが明らかになった。「結婚して良かったこと」として、「子ども」という回答が突出しており、「子どもを持つなら結婚は必要」という意識も強く、結婚制度の枠外で子どもを持つことへの抵抗や不安が見て取れた。夫に対して不満があるとしても、母親役割の重要性や子育ての喜びを思えば、夫との関係性を調整しながら折り合いをつけていく様子が見られた。

第三に、夫婦間の性別役割分業が、そのまま夫婦を主従関係にするという意識はあまり共有されていないことがわかった。夫婦間で収入差がある場合がほとんどであるが、それが夫婦の主従関係に結びつくとは意識されておらず、また、経済的な貢献ばかりが対等性に重要と考えられているわけではなかった⁽¹¹⁾。妻が夫と同額の収入を得ることが対等な夫婦関係に必要であるという回答はほぼなく、互いに言いたいことが言える関係や精神的な支えによって良い関係を構築することが、夫婦を対等な関係にすると意識していることがわかった⁽¹²⁾。

第四に、本調査においては、東京と比較して熊本と北九州の女性の方が、夫婦のあり方に関して保守的であるという知見は見いだせなかった⁽¹³⁾。

全体的に、女性たちは母親役割意識を強

く内面化しており、女性自らが、程度の差はあれ、自発的に性別役割分業を受け入れている傾向がみられた。多くの女性たちは、子ども及び子どもを育てられる環境を得たことに結婚の最大の意義を見出していた。夫婦間の性別役割分業は、女性を強く抑圧・拘束する制度とはもはや意識されておらず、性別役割分業を維持することと夫婦の対等な関係を保つことは、両立が可能であると意識されている。子どもを持つ既婚女性が夫と同じような経済力をつけて家事育児も同程度分担することに比べれば、「夫は仕事、妻は家庭」というように守備範囲を明確に分けて分担する方が、遥かに現実的な選択ととらえられていた。

8. おわりに

「夫は仕事、妻は家庭」という従来の性別役割分業を前提とした夫婦の関係は、多くの女性たちにとって、経済的・精神的安定を得られる仕組みとなっており、解体する方向に持って行く積極的な理由は今のところ見出しにくいケースが多かった。しかし他方で、葛藤や迷いを抱えて、多少なりとも変化を求めている女性たちの存在も明らかになった。夫婦の固定的な性別役割分業を変化させていくためには、女性たちが呑み込んでいる不満の一つ一つを丹念にすくい上げ、諦めない道を模索していくことが必要ではないか。

インタビュー調査に協力してくださった40名の女性たちに、深く感謝いたします。

注

- (1) 調査対象者は全員法律婚をした女性であるが、離婚者4名、再婚者1名を含んでいる。

- (2) 各執筆の主な担当は、「1」「2」「6」「8」は笹川、「3」は池松・小関・北原、「4」は北原・小関、「5」は池松、「7」は笹川・小関である。
- (3) 本論文は同テーマの研究報告書の要約的論文であり、字数の関係上、各調査地域（東京、熊本、北九州）に分けた分析、女性の就業形態による意識の違いの分析、固定的な性別役割分業意識に抵抗を感じている女性や離婚した女性等の少数派の事例も含めた被調査者の語りの詳細は、ここでは取り上げていない。
- (4) 女性学における性役割研究は、家庭における夫婦の性役割のみならず、「男が主役で女は補佐」といった社会のあらゆる側面にしみこんでいる「男役割」「女役割」を対象としている（井上2009）。
- (5) 桜井厚（2002）28頁を参照。
- (6) ライフストーリー研究では、次のような認識が共有されている。それは実際に起こった出来事や語り手の経験と、それを語ろうとする言語行為にはギャップがあるというものだ。体験や経験は第三者にとり観察可能なものであるが、語りとは、語り手のイメージ、感覚、感情、欲望、思想、意味などをもって成立するものである。桜井厚（2002）：31-32頁。
- (7) 例えば、岡本（2000）や松信（2000）など。
- (8) インタビューした女性40名中、子どもがいないのは北九州の2名である。その2名とも将来的には子どもを持つことを望んでいた。
- (9) こうした「母性主義」は日本の家族関係の1つの特徴であるとされる（瀬地山2010）。
- (10) 夫婦間の対等性に関して、様々な側面から多くの研究が行われている。例えば、夫婦の対等性と結婚満足感との関係について検討した竹内（2007）は、夫婦の対等性を「夫婦のサポートの授受が衡平な関係」としている。
- (11) しかし、既婚女性の就業はもはや当たり前のこととなり、稼ぎがあるということは、多少なりとも夫婦関係に対する妻の対等意識に自信を与えているようであった。

- (12) 永井 (2007) によると、妻の経済力の向上は夫婦を対等なものにするとは限らず、また、夫婦が対等を目指すことは、夫婦間に葛藤をもたらす可能性がある。対等になることがゴールではなく、対等性を築こうとする互いの愛情や歩み寄りこそが夫婦の満足性を高めるのではないかと指摘している (永井 2007: 144)。
- (13) 本調査は質的調査であり、全体的な傾向を示すには調査対象者の数も少なく、また対象者の偏りが想定されるという難点があった。それでも、地域性や世代の差が女性たちの意識に影響を与え、それぞれの地域の特徴といったものが多少は浮き出てくるのではないかと考えたが、結果としては大きな差は見られなかった。

参考文献

- 井上輝子 (2009) 「日本の女性学と『性役割』」天野正子・伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納美紀代編『新編 日本のフェミニズム3 性役割』岩波書店、1-37。
- 岡本英雄 (2000) 「日本型雇用慣行の変化と母親意識－周辺化する女性労働力」目黒依子・矢澤澄子編『少子化時代のジェンダーと母親意識』新曜社、131-148。
- スーザン・モラー・オーキン (2013) 山根純佳・内藤準・久保田裕之訳『正義・ジェンダー・家族』岩波書店。
- 落合恵美子 (2004) 『21世紀家族へ (第3版)』有斐閣。
- 国立社会保障・人口問題研究所編 (2014) 「第5回全国家庭動向調査」http://www.ipss.go.jp/pskatei/j/NSFJ5/NSFJ5_gaiyo.pdf (2014年10月3日アクセス)。
- 瀬地山角 (2010) 「結婚の「きしみ」を越えて」北九州市立男女共同参画センター“ムーブ”『ジェンダー白書7 KEKKON 結婚 女と男の諸事情』、明石書店、10-20。
- 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学－ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 島直子 (2012) 「家族規範と結婚の変容」松信ひろみ編著『近代家族のゆらぎと新しい家族のかたち』八千代出版、23-39。
- 竹内真純 (2007) 「夫のサポートが夫婦の結婚満足感を高める」永井暁子・松田茂樹編『対等な夫婦は幸せか』勁草書房、77-94。
- 林郁 (1985) 『家庭内離婚』筑摩書房。
- ウヴェ・フリック (2011) 小田博志監訳『質的研究入門〈人間の科学〉のための方法論』春秋社。
- 永井暁子 (2007) 「対等な夫婦は幸せか」永井暁子・松田茂樹編『対等な夫婦は幸せか』勁草書房、137-147。
- 中川まり (2010) 「子育て期における妻の家庭責任意識と夫の育児・家事参加」『家族社会学研究』第22巻、第2号、201-212。
- 牧野カツコ (2010) 「2章 子育ての父母分担は世界いろいろ」牧野カツコ・渡辺秀樹・船橋恵子・中野洋恵編著『国際比較にみる世界の家族と子育て』ミネルヴァ書房、27-42。
- 松田茂樹 (2013) 『少子化論』勁草書房。
- 松田智子 (2000) 「性別役割分業から見た夫婦関係」善積京子編『結婚とパートナー関係：問い直される夫婦』ミネルヴァ書房、125-146。
- 松信ひろみ (2000) 「就業女性にとっての職業と子育て－『子育てよりも仕事』は本当か?」目黒依子・矢澤澄子編『少子化時代のジェンダーと母親意識』新曜社、149-168。
- ____、(2002) 「夫婦の勢力関係再考－勢力過程への着目とフェミニスト的視点の導入」『新潟ジェンダー研究』、No.04、31-46。
- 円より子 (1982) 『主婦症候群』文化出版局。
- 善積京子 (1997) 『〈近代家族〉を超える』青木書店。